

高齢者の居場所づくりによる街中にぎわい計画 ー世代を超えた絆づくりー

建木健^{*1)}、建木良子²⁾、藤田さより¹⁾、鈴木達也¹⁾、堀米美紀³⁾、鈴木基生⁴⁾

¹⁾ 聖隷クリストファー大学、²⁾ NPO法人えんしゅう生活支援 net、³⁾ NPO法人あくしす、⁴⁾ 田町パークビル株式会社

【背景】

しんきん経済研究所の調査結果、顧客は浜松市駅周辺の店舗で過去2年間に買い物をしなかった人の割合が4割を超えている。近年は大型ショッピングモールへと人が流れる傾向にあり、駅周辺における集客力の低下及び空洞化現象は市全体の経済の流れを低迷させる一因ともなっている。また、浜松市中央地区における高齢化率は30.7%で、さらに地域によっては60%を超えるところもあり、浜松市全域の高齢化率である22.7%を上回るなど都心部の高齢化率は高い傾向にある。近年、介護度の要支援者が増加傾向にあり、このことは介護度の良化を示しているが、現実はいまだに利用していたサービスが使えなくなるなどの問題も含んでいる。このような中、介護保険の分野では利用者の大幅な増加や、ニーズの多様化から、希望に見合ったサービスを受けることが難しく参加の機会がなく社会に「居場所」が見つけれないまま閉じこもりとなっている高齢者や障害者の存在は否定できない。前述の経済の低迷に加え、地域福祉の事柄を違った角度で考えれば障害者や高齢者の既存の送迎付き通所サービスだけでは人の動きは単一的でそれ以上の経済効果は期待できない。そこで商店街において高齢者の居場所づくりを行い地域の活性化を目的に本事業を実施する。

【方法】

浜松市商店街において空き店舗（浜松市田町商店街）を活用し、要支援者及び特定高齢者を中心に「居場所」を提供する。そしてその「居場所」に集まる若者及び団塊世代を含めて世代間交流のスペースとする。

居場所内での活動内容は、自由なオープンスタイルとし滞在時間及び利用開始時間等は問わない、自由な時間に利用できるようにする。この世代間交流を通して、高齢者の役割づくりと社会参加への意義を体験していただく、また若者にとっては、この場を利用して、高齢者理解と社会参加への意義を理解する。また、不定期にイベント作業（健康体操、陶芸や革細工などニーズに合わせた活動を提供）を開催する。実施者は、常駐スタッフ（団塊世代）、学生ボランティア及び作業療法士で行う。参加者の確保においては、地域包括支援センター及び公民館、折込チラシにて広報を行う。「居場所」の開催時間は週2回で10:00～15:00までとして6か月間実施予定とする。参加延べ人数は、1日5名程度とし、事業終了後の参加者延べ人数見込み数は240名である。効果測定として参加延べ人数とした。

常設型「居場所」は、「まちの縁側」や「コミュニティカフェ」などとも呼ばれ、近年全国的に広がっている。東日本大震災は、地域の絆づくりや支え合いの大切さを再認識する契機となったが、常設型「居場所」の取組は、



介護予防・認知症予防、引きこもり・孤独死予防、子育て支援・障がい者支援など、多くの社会的な効果が期待されている。一昨年には静岡県の委託事業として常設型「居場所」づくりが行われるなど関心が高くその意義に期待される場所である。今後、福祉において「居場所」がキーワードとなり、世代を超えたコミュニケーションの場として若者から高齢者までが集える空間が地域福祉や経済的視点においても重要な要となる。商店街を活用し、福祉とのコラボレーションという発想で新たな人の流れを作り、既存の資源を利用してこれからの街づくりの構想が広がっていくことが期待される。

【経過及び結果】

2012年6月11日より2013年2月18日まで、カギヤビル2階（9月よりたけし文化センターインフォラウンジに移転）にて計61回実施し老若男女を問わず295名（1日平均2.42名）がこの居場所（フクロ工房）を利用した。運営に当たり、事業計画とコンセプトのプレゼンテーションを開催し、浜松市田町繁栄会、NPO法人クリエイティブサポートレッツ、NPO法人えんしゅう生活支援net、聖隷クリストファー大学学生及び教員、静岡医療科学専門学校学生及び教員、浜松大学学生及び教員より賛同を得ることができた。

実施に当たっては、参加者（特に高齢者）の伸び悩みが課題となった。その為、参加者へのインタビューを実施し、以下の課題が明確となった。①その場においてもやることのない②広報が伝わるべきところに伝わっていない③カギヤハスの場所がわかりにくい④イベントの情報もネット上であることを中間の課題として確認していた。その後、9月より常設場所を移転することとなり、NPO法人クリエイティブサポートレッツの管理する「たけし文化センターインフォラウンジ」内に移転となった。

2012年度卒業研究の課題として堀米美紀は、「街中の居場所づくりにおける現状と課題ーフィールドワークを通してー」というテーマでこの居場所の運営スタッフとしてフィールドワークを通して人が集まらない理由を分析した。期間は平成24年9月3日から平成24年10月17日の間、フクロ工房が開かれる毎週月曜日と水曜日の週2日、計12回のフィールドワークを実施した。主なインタビュー内容を利用目的とし、どのような事を求めているかを記録した。その結果、利用者はほぼ固定しており、利用目的としては「仕事などを行うため」、「スタッフとの会話の為」、「時間潰し」、「企画や施設の紹介」などを目的として訪れている方が多かった。（表1）また利用者はフクロ工房と何かしらの関係がある人が多く、地域の高齢者層が訪れることは少なかった。また利用者が訪れたとしても直ぐに帰ってしまっている現状から、何が原因となり本来の機能を果たすことが出来ていないのかを追求した。

その結果、利用し難い理由としてインタビューからは、「①ガラス張りの反射によって室内の様子が伺えられず不安」、「②中に入っても見学できるものなどが無く、目的無く入って行けない」、「③暗く、雰囲気閉鎖的」、「④既に利用している人たちでグループが出来上がっているように感じ、居づらさを感じる」、「⑤中に入っても何をやっていいかが分からない」、「⑥何をやっているところなのか分からない」といった事が挙げられた。



【考察】

本事業において、高齢者の居場所づくりを街中で実施したが、さまざまな要因から高齢者が集える場となり得なかった。

山崎によると、高齢者が生活の中で充実感を感じる時として最も多い意見が「趣味」次いで「雑談」という結果が出ており、また地域のコミュニティの場の特性として、①中の様子が伺える開けた環境であること、②多数の友人・知人が訪れる場であること、③いつでも趣味活動など何かしらの作業が行なえ、尚且つ参加性の自由があること、以上3つの点が述べられている。これらの条件と比較しても、居場所となりうるための趣味といったような高齢者が共通して楽しめる作業が存在しなかったことが大きな要因であったと考えられる。

また澤らによると、作業におけるコミュニケーションは、通常の言語によるコミュニケーションに加えて、作業活動（行為・動作）やモノ（材料・道具・作品）を媒介にすることが多く、コミュニケーションに非言語的な要素の占める割合が大きいという特徴がある。こうした「モノの媒介」のコミュニケーションは、言語によるコミュニケーションと比較すると、①相互に適度な心理的距離を保ちやすく、②作業がもたらす共有体験が基盤となり、③具体的・現実的な関わりがもちやすい、といった利点があると述べている。つまり、何かしらの作業を媒介にすることによって人と人との交友関係を円滑にする可能性が伺える。

【今後の展望】

本研究を持って高齢者の居場所づくりは終了し多くの課題を残すと共に新たな知見を得る結果となった。また9か月間という短い期間であったが、街中の抱える課題や高齢者の在り方を改めて考えさせられた。

現在は、本事業をもとにテーマ性を持った集いの場を設ける予定であり、住民主導型で企画が上がっている段階であり、「昭和日常博物館 at ゆりの木通り」(仮)という企画を構想中である。



中日新聞 2012.9.6 掲載

表 1 利用者の利用時間及び目的

	頻度	性別	年齢	職業	時間帯	目的
Aさん	4回	男性	60代	芸術家	13時～14時	私用のPCがなく、PC利用の為にフクロ工房が開かれる以前からたけし文化センターを利用していた。
Bさん	5回	男性	20代	大学生	13時～15時	インフォラウンジスタッフの方とルームシェアをしており、その紹介によりフクロ工房を利用。主にPCでの仕事をフクロ工房では行っている
Cさん	4回	女性	10代	塾生 (浪人生)	14時～15時	近所の塾生で、利用当初はインフォラウンジのスタッフに用事があり訪れた。その後紹介で、授業の無い暇な時間に息抜きとして利用。
Dさん	4回	女性	10代	塾生 (浪人生)	14時～15時	当初はCさんの付き添いであったが、2回目からはCさんと同じく授業の無い暇な時間にCさんと共に息抜きとして利用。
Eさん	2回	男性	40代	社会人	13時～14時	フクロ工房スタッフから宣伝を受け、リハビリや映画の場りに利用。主にスタッフと会話を目的とする。
Fさん	1回	女性	10代	塾生 (浪人生)	14時～15時	C、Dさんの友人で、紹介を受け利用。同じく授業の無い暇な時間にCさんと共に息抜きとして利用。
Gさん	1回	女性	60代	不明	14時頃	看板や新聞を見て、友人と共に利用しようとしていたが、友人が用事の為利用は断念。一人だと利用しづらいので、また来ますとの事であった。
Hさん	1回	女性	60代	不明	13時半頃	新聞でフクロ工房の記事を見て、どんなものか気になって様子を見に立ち寄ってみた。
Iさん	1回	男性	50代	社会人	13時半～14時	たけし文化センター管理人の紹介により利用。福祉の家族会に入っており、主に施設の話をしに来ていた。
Jさん	1回	女性	40代	社会人	12時半～13時半	たけし文化センター管理人の紹介により利用。福祉関係の仕事をしている為、主に施設の話をしに来ていた。
Kさん	1回	男性	40代	社会人	11時半～12時	たけし文化センター管理人の紹介により利用。施設団体を運営しており、外出介助アルバイトの募集の話などをしに来ていた。
Lさん	1回	男性	60代	不明	13時～14時	たけし文化センター管理人の紹介。学生ボランティアを募集しており、その宣伝も兼ねて話をしに訪れた。
Mさん (団体)	1回	団体	20～40代	社会人	13時半～14時	フクロ工房スタッフから宣伝を受け、映画の場りに利用。主にスタッフと会話を目的とする。
Nさん	1回	男性	60代	不明	12時頃	街中でボランティア企画をしに来ており、道を聞くためにフクロ工房へ立ち寄った。その後時間があつたため小一時間程利用。
Oさん	1回	女性	50代	不明	14時頃	インフォラウンジにあるチラシを求めて立ち寄ったが、チラシを貰いに来ただけで何も利用せず。
Pさん	1回	男性	30代	社会人	14時～14時15分	仕事の打ち合わせのためにAさんとフクロ工房で待ち合わせをしており利用。

堀米 (2012)